



TITLE:

オーストリア国民意識の国制構造  
ー帝国秩序の変容と国民国家原理  
の展開に関する考察ー(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

梶原, 克彦

---

CITATION:

梶原, 克彦. オーストリア国民意識の国制構造ー帝国秩序の変容と国民  
国家原理の展開に関する考察ー. 京都大学, 2015, 博士(法学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12909>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（法学）	氏名	梶原 克彦
論文題目	オーストリア国民意識の国制構造 — 帝国秩序の変容と国民国家原理の展開に関する考察		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の主題は、戦間期オーストリアにおける指導的保守政治家を対象として、既存の国制論の再解釈による新生国家の正当化ならびに広域秩序をめぐる模索の試みを検討し、国民国家形成における政治的伝統の作用に光をあてる点にある。</p> <p>序章では、本研究の意義が提示される。十九世紀後半以後保守主義とナショナリズムはその出自を異とするにもかかわらず右派において結合することになるが、多民族王朝国家たるハプスブルク帝国ではナショナリズムへの接近は回避された。ところが第一次世界大戦の帰趨に伴い帝国が崩壊すると、新生オーストリアはその狭小さに伴う経済不安と民族自決論に基づくドイツとの合邦論のもと、発足当初よりその存在の正当性が疑問視されるに到る。ここで国家運営を担った保守層は、国家独立と中東欧の広域秩序をめぐる問題に、旧来の国制論の読み替えによって臨むことになる。かくしてその思想的営為を分析することで、国民国家形成の作為性とそこに伝統が及ぼす影響が明らかになると指摘する。</p> <p>第一章および第二章では、カトリック派のザイペルの思想が検討対象となる。第一章では、二重帝国期における民族問題の発生と、それに対する諸党派の反応について瞥見した後、ザイペルの民族観について、国家的帰属との峻別が強調される一方、両者を架橋し、民族国家を超克する秩序としてライヒを思い描いたと指摘する。かかる政治秩序像に基づきザイペルが提起した中央集権的ライヒと民族自治から成る国制改革案について、その理念の背景にはカトリック教会があったと論じる。</p> <p>第二章では、戦間期におけるザイペルの理念の連続と変遷が検討される。望まれたのではなく、強いられた独立という状況のもとで首相に就任したザイペルは、自身のドナウ連邦案と合邦容認との間で揺れ動いた。条約によって合邦が禁止されて後は、戦前における民族・国家の分離論を顛倒させ、国家に対する民族の優越を説くことで小国の存続を正当化する一方、汎ヨーロッパ的広域秩序の模索にその理念が投影されたと論じる。さらにこうした思想はザイペルひとりのものではなく、そこには中東欧における民族問題の解決とドイツ民族の使命という点で同時代的課題が反映されていたと指摘する。</p> <p>第三章では、ドイツ性に立脚しつつ、かつ合邦に抵抗した首相ドルフースのドイツ観の特質について考察する。ドルフースはナチズムとボルシェヴィズムへの対抗理論として、キリスト教的国家理念を打ちだし、「より善きドイツ人」たるオーストリア人の使命を諸民族の仲介に見出した。かくしてドルフースは真のドイツ性を守るため</p>			

に合邦を拒絶する一方、総ドイツ圏における指導的地位という観点から対独関係の維持にも腐心し、国内では中世を範とする反近代的革新に邁進したと論じられる。同時にここでオーストリアは国家としてはドイツから差異化されるものの、文化共同体としてはドイツとの一体性が観念されていると論じ、旧来の多文化的自己像からの変容に注意を促す。

第四章では、ドイツ本国には超民族的なドイツ性をもって対峙する一方、非ドイツ圏には民族的優位性を誇示するオーストリア・イデオロギーの二面性について指摘したうえで、これを継承して独立維持を唱えた首相シュシュニツクの政治思想を検討する。その第三オーストリア論では、ライヒが精神的・文化的共同体として観念されており、この点で暴力に依拠する第三帝国との違いが強調される一方、小国だからこそオーストリアはライヒを創設することができ、中東欧における平和的秩序の構築に寄与できると説く。さらに民族と国家の区別を前提とする点で、伝統的思想との連続性ととともに、近代国民国家論に対する批判的契機が認められるとする。強固なドイツ民族意識のために独自の国民意識の形成に到らず、合邦は避けられなかったが、シュシュニツク時代には上からの、意図せざる〈国家国民〉創造の試みがあったと指摘し、その独立維持論を戦後への過渡的局面として位置づける。

第五章では、首相として合邦を受け入れたザイス＝インクヴァルトの人種論的ライヒ論について考察する。合邦論においても想定されていたオーストリア領の自立性は、事実上の併合をもって剥奪されたが、ザイス＝インクヴァルトはその意義を、ゲルマン人種が指導する階層的広域秩序構築の起点となったことに見出したと指摘するとともに、その思想を国民国家の超克をめざす運動の一角をなすものとして把握する。

最後に第六章では、ドイツとの差異化を通じてのオーストリア国民意識の成立過程について検討する。戦後の第二共和政における政治的・経済的安定と中立政策、ドイツの負の印象と「犠牲者」としてのオーストリア観の強調によって、独逸の小異が国民／民族的差異にまで高まったと指摘するとともに、欧州統合の進展がもたらすオーストリアのアイデンティティの動揺について考察する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、戦間期オーストリアの政治指導者が新生国家の正当化ならびに広域秩序の模索にあたって、既存の国制観の再解釈によって臨んだことに注目し、その思索的営為を綿密に分析することで、国民国家形成における作為の契機とともに、その作為が国制をめぐる政治的伝統の粘着的な作用によって規定される逆説的側面があることを鮮やかに論証する意欲的研究である。

国民国家研究としてオーストリアという限界的事例に着目したことは、次の二つの点で本論文に特色と意義を与えている。第一に、領域外に民族上の「母国」を抱えることから、その存立にあたって民族自決論に依拠することがそもそも困難であったが、それゆえに同国の国民意識形成の過程を分析することで、国民国家の作為性を明晰に剔出することができる。

第二に、民族の混住する中東欧地域に国民国家原理を適用したことは、多大な混乱を惹起し、それゆえにこれに代わる広域秩序がたえず構想されたが、このときすでに消滅したライヒをめぐる伝統的国制観が、戦間期においてもなお準拠すべき枠組として重要性をもちつづけたことを、指導的政治家の言説を丹念に辿ることで説得的に検証している。

さらにカトリック系の保守政治家の思想に焦点を定めたことで、伝統的思考が連続性を保ちつつも、同時代的状況との相互作用のもとで、柔軟かつ多様に変奏されてきたことが詳らかにされる。民族自決論に基づく独逸合邦論に対峙しつつ小国の存続を正当化し、また広域秩序の形成を模索した背景に、一貫して保守主義とナショナリズムとの緊張を孕んだ関係があったことを的確に指摘するとともに、国制をめぐる既存の理念を継承しながらも、そこから抽出するものは時代の要請に応じて一様ではなく、ザイペルにおける超民族的秩序としてのライヒ、ドルフースにおける文化共同体としてのドイツの一体性と国家としての分立、シュシュニクにおける小国による精神的・文化的ライヒの創設、さらにザイス＝インクヴァルトによる人種論的ライヒ論と、それぞれの構想の変遷を注意深く追うことで、オーストリアの自己像もまためまぐるしく変容してきたことを鮮明に描きだしている。

一連の研究が有する今日的示唆についても著者は自覚的である。ポスト国民国家期における民族的少数派や移民の包摂に関する問題状況に、歴史的事例が有する意義について随所と言及されるとおり、戦間期における超民族・超国家的秩序構想にたいする評価は今なおドイツ・オーストリアにおいて議論的となる一方、多文化主義や欧州統合というかたちでその関心は引き継がれている。過去の経験と思考が現代にたいしてもつ含意について、本論文における著者の考察は萌芽的なものに留

まっているものの、ここで得た所見を礎として、ナショナリズムやアイデンティティ政治にかんする喫緊の諸問題をめぐる考究に、さらなる寄与をなしうるものと期待できる。

保守政治家による政治秩序像の模索を、伝統と作為の交錯として明確に描きだし、単にオーストリア政治のみならず、国民国家研究にとっても有意義かつ発展性ある知見を示した点で、本論文が高い学術的価値を有することは明らかである。

以上の理由により、本論文は博士（法学）の学位を授与するに相応しいものと認められる。

平成27年2月4日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降